英語圏児童文学会 第 51 回研究大会　研究発表・シンポジウム要旨

大会 1 日目　10 月 16 日（土）

研究発表 2021 年 10 月 16 日（土）　12:40-15:10 @Zoom A, B, C

zoom A 12:40-15:10

●司会：作間和子（上智大学）12:40-13:50

発表1 Montgomery 作品における生家を離れられないヒロイン

井上牧恵（一橋大学博士課程前期）

Montgomery 作品において、ヒロインたちは彼女たちの人生を家に委ねていると考えられる。Montgomery の代表作 *Anne of Green Gables* (1908)のヒロイン Anne は、Green Gables に引き取られる際、自分の新しい家族よりも家に関心を寄せている。また彼女は生まれてすぐに亡くなった両親よりも自分の生家を繰り返し想像しており、過去や未来における彼女の人生が幸福なものであるかどうかを家に委ねていることがわかる。Montgomery 作品のヒロインたちは家を擬人化して家族や友人のように捉え、特別な思いを寄せる傾向が見られるが、*Pat of Silver Bush* (1933)及び *Mistress Pat* (1935)のヒロイン Pat は、特に家に対する結びつきが強い。幼い頃から家族と共に暮らす場所として家を愛していた Pat だが、生家である Silver Bush を離れたくないがために進学や結婚を拒むようになる。Montgomery 作品のヒロインたちは成長過程で新しい家と出会い、そこで新しい家族や友人との出会いや人生を変える出来事を経験することが多いが、Pat は生家に執着するあまり他の物事に関心を示さなくなっていく。

Pat の他に Montgomery 作品で生家に住み続けているのは、Anne Books の Marilla と Emily Books の Elizabeth である。Marilla は孤児だった Anne を引き取り、Elizabeth は兄妹の協力を得て家を守っている。その一方で Pat は変化を拒絶した結果、兄妹たちからも取り残され家の将来性を失わせてしまった。生家を変化から守ろうとして来た Pat だが、自分ひとりでは家を存続することはできず、家には home としての存在意義があることを思い出したのだと思われる。また最後に生家を失って新しい土地へと移る Pat は、人生における旅を通して成長する姿を見せる、ヒロインとしての役割を最終的に達成したと考えられる。

また Montgomery 作品にはゴシック小説の系譜が見られる。先祖と思われる霊の存在を感じた Pat が、愛する家にいながらもホームシックになったような気持ちを抱く場面があることから、Pat が心から「自分の家」にすることができる家を探していた可能性についても考える。

発表2 「エミリー」シリーズにおけるエミリーの作家としての歩み

津谷紗月（日本女子大学大学院修士課程2年）

本発表では、モンゴメリ（Lucy Maud Montgomery, 1874-1942）による「エミリー」シリーズを取り上げ、エミリーの作家としての才能の芽生えと成長を追う。そして、本シリーズをめぐる評価の再検討を試みる。

物語は、両親と死別したエミリーが親戚に引き取られるところから始まるが、この時点でエミリーは既に自我を確立し、書くことへの性向を持ち合わせている。亡き父に宛てて書く手紙を通して創作意欲に目覚め、将来は有名作家になることを決意し、物語の執筆や投稿を始める。注目すべきは、書く行為の支持者のほとんどが、男性であるということだ。その後出会うカーペンター先生やディーンは、早いうちからエミリーの書く才能を見抜き、手厚く指導する。しかし、本シリーズに登場する男性たちは皆何かしらのハンディキャップを抱えており、エミリーを作家へと導く一方、彼女からの助言や神秘的な力、千里眼的能力によって助けられることがある。こうして周囲を不思議な力で操るエミリーは、まるで歪んだ世界に君臨する巫女のような存在感を放つ。創作活動においても、エミリーは周囲の声に屈することなく、神秘的な恍惚状態に触発されて書き続ける。さらに、どんな挫折を味わおうとも書くことを諦めず、怒りや苦悩、葛藤をも芸術に昇華し、作家として成功を収めた。

このように、エミリーは不思議な存在感と非凡な才能を持ちながらも、地道な努力を続け、なるべくして作家になった稀有なヒロインである。本シリーズは、「作者の自伝的作品」や「『赤毛のアン』(Anne of Green Gables, 1908)に次ぐ作品」とみなされることが多いが、エミリーの体現する女性像には、作者やアンの分身としてではない独自の魅力がある。特に、強い意志を抱いて高みを目指すエミリーの歩みは、女性の働き方や選択肢が多様化した今現在こそ、注目に値すると考えられる。

●司会：伊藤淑子（大正大学） 14:00-15:10

発表3 ジェーン・アダムズ児童図書賞（The Jane Addams Children's Book Award）受賞作品にみる「平和」ついての一考察

牛山通子（婦人国際平和自由連盟・日本支部会員）

ジェーン・アダムズ児童図書賞は、1953 年以来、平和、社会正義について書かれた優れた児童図書に与えられている。初期には、婦人国際平和自由連盟（Women's International League for Peace and Freedom: 略称 WILPF）とジェーン・アダムズ平和協会（the Jane Addams Peace Association ： 略称 JAPA）の共同によって与えられていたが、現在はジェーン・アダムズ平和協会によってのみによって与えられている。

ジェーン・アダムズ（1860-1935）は、1899 年ハル・ハウス（Hull House）をシカゴに設立し、社会事業家としてセツルメント運動を展開したソーシャルワークの先駆者である。また、1915 年、第一次世界大戦の最中に、戦争に反対してオランダのハーグに集まった女性たちにより結成された世界で一番古

い女性の平和団体、婦人国際平和自由連盟の初代会長となった。1931 年、WILPF の指導者とその社会改革 に対して、アメリカ人女性で初めてノーベル平和賞を受賞した。

婦人国際平和自由連盟は、人種、性別、宗教、思想的立場を超え、恒久平和の実現を願う女性の NGO である。2020 年現在 50 か国に支部を持つ。

また、ジェーン・アダムズ平和協会は、1948 年シカゴの WILPF のメンバーによって、ジェーン・アダムズを称え、平和への彼女の仕事を継続するために設立された。

ジェーン・アダムズ児童図書賞は「お隣さんのことを考えるように、お隣の国を考えよう。そして、平和を実現しよう」をモットーとしたジェーン・アダムズの遺志を継ぎ、若い読者が平和、社会正義、ジェンダー・人種の平等、環境、異文化共存について、深く考えることを促す児童図書が受賞対象となっている。子どもの視点で、優しい言葉で描かれている低年齢層を対象にした受賞作品を対象に、テーマの分析、分類を行いジェーン・アダムズ児童図書賞が意図する平和について考察したい。

発表4 *Wintergirls* における摂食障害の表象

大藪加奈（金沢大学）

YA 小説では、青少年が抱える問題がしばしば扱われるが、摂食障害は最近扱われることが多いテーマの一つである。摂食障害に関わる言説は、医療関係文献やセルフヘルプ図書、ノンフィクションや体験記、そしてフィクションの分野で重なるところや影響し合うところがあり、フィクションの分野ではインクルーシブ小説として摂食障害を抱える読者に寄り添い、摂食障害の問題を啓発する役割もある。本発表では、摂食障害に関する YA 小説として評価の高い、Laurie Halse Anderson の *Wintergirls*（2009）において、メンタルヘルスに問題を抱える登場人物のボディーイメージや摂食障害の病理の描かれ方を、ジェンダーの観点から読み解き、主人公（Lia）がモノローグでも現実を打ち消し、見え隠しの形で言い直す特殊な記述方法や、それぞれの食品の持つカロリーをその食品を示す言葉と共に表記する方法などの特異性を通して、摂食障害を抱える主人公の目からみた世界の捉え方をどのように示そうとしているのかを説明し、インクルーシブ小説としてのこの作品の意義を評価する。

zoom B 12:40-15:10

●司会：藤井佳子（奈良女子大学） 12:40-13:50

発表5 *The Ghost of Thomas Kempe* における記録と記憶

磯部理美（一橋大学博士課程後期）

イギリスの作家 Penelope Lively のカーネギー賞受賞作、*The Ghost of Thomas Kempe* (1973)は、17 世紀に生きていた魔術師のポルターガイスト "Thomas Kempe" の破壊的な行動に悩まされる少年 James の姿を描いた児童文学である。Oxford の St. Anne's College で現代史を専攻し、歴史に強い関心を持つ Lively は、歴史や記憶、あるいは過去からの継続性を主題とした作品を多く生み出している。こうした主題や、幽霊物語としての性質の類似性から、Lively の作品は、Lucy Boston の *The Children of Green Knowe* (1954)や Philippa Pearce の *Tom's Midnight Garden* (1958)などの作品と並べて語られることもあるが、これらの作品と異なる Lively の作品の重要な特質として、歴史ないし記憶という主題を描く際に物質的な過去の「記録」を登場させ、それらを有効に用いていることが挙げられる。*The Ghost of Thomas Kempe* (1973)においては、そうした歴史的な「記録」は古い日記や手紙、写真といった形で物語に登場し、過去の「記憶」について語る上でそれらが重要な役割を担っている。本発表では、*The Ghost of Thomas Kempe* (1973)においてこうした「記録」がもつ役割や意義について考察し、Lively 作品の独自性の一端を明らかにしたい。

発表 6 *Never Let Me Go* と *Klara and the Sun* の相互関係：
クローンと AI のこころの在り処

海老塚日菜子（日本女子大学大学院博士課程1年）

Kazuo Ishiguro(1954-)は歴史小説からファンタジーまで、作品ごとに異なるジャンル・題材を扱う作家である。

Never Let Me Go(2005)ではディストピアの雰囲気を感じる世界で、人間へ臓器提供をするために存在するクローンたちが描かれた。クローンたちは自らに存在する愛やこころを信じることで自分たちの存在価値を見出そうとしている。

一方、*Klara and the Sun*(2021)もまた SF めいた近未来を舞台に、子どもの世話をするための人工知能が描かれている。2021 年 3 月に発売されたこの最新作はさまざまなジャンルに挑戦してきた Ishiguro にはめずらしく、過去作品である *Never Let Me Go* を想起させるような題材にあふれている。例えば、クローンに、AI にこころは在るのか、と読み手に考えさせるような、世界のアウトサイダーである彼女たちの語りは両作品の大きな共通点の1つである。両作品はどちらも主人公の一人称語りでありながらその語りを比較すると、自身の都合の良いように語りを騙る Kathy には非常に人間味を感じる一方で、語りに一切自己都合を含めず、カメラのレンズのように描写に徹する Klara には機械的な性質が感じられる。

本発表では、クローンと AI のこころの在り処に注目しながら両作品の共通点および相違点を比較し、両作品の関係性を考察したい。両作品は互いに比較することでクローンの人間性と AI の機械的性質を相補的に強める関係性にあると考える。

●司会：水間千恵（白百合女子大学） 14:00-15:10

発表 7 『ハリー・ポッター』シリーズにおける奴隷労働の正当化
――屋敷しもべ妖精の幼児性を中心に――

高橋優佳（筑波大学大学院）

「屋敷しもべ妖精」(House-elves)は、J・K・ローリング(J. K. Rowling, 1965-)の『ハリー・ポッター』シリーズ(Harry Potter series, 1997-2007)に登場する、魔法族に隷属し、魔法界において奴隷的労働を強いられている魔法生物である。屋敷しもべ妖精は第 2 巻『ハリー・ポッターと秘密の部屋』(*Harry Potter and the Chamber of Secrets*, 1998)で初登場して以来、本シリーズの様々な場面において主人公ハリー・ポッター(Harry Potter)たちと関わり合い、時には物語展開の鍵を握る存在でもある。しかしながら屋敷しもべ妖精はその性別や年齢に関係なく、作品全体を通して未熟な幼い子どもを想起させ、哀れを誘う存在として描かれている。本発表は『ハリー・ポッター』シリーズにおける屋敷しもべ妖精の社会的地位や労働状況に着目し、原作と映画版の双方における描かれ方を比較しながら検討する。その上で、本作が屋敷しもべ妖精の幼児性を強調していることに注目し、魔法族が魔法界における屋敷しもべ妖精の奴隷的労働を、未熟で哀れなしもべ妖精を保護下に置くための最善の策として「正当化」していることを明らかにしていく。

発表 8 ミンチン学院で起きたこと――F. Burnett と若松賤子の試み――

鈴木宏枝（神奈川大学）

Frances Hodgson Burnett の *A Little Princess*（1905）は、1887 年に *St. Nicholas Magazine* で連載されたものを単行本化した *Sara Crewe, or What Happened at Miss Minchin's*（1888）を大幅に加筆修正した作品である。時間を置き、演劇版を介したことで、Sarah の想像力のディテールがふくらみ、Lottie への母性も加わった。誇り高く、空想力と意志の力で運命を変えていく少女像が「プリンセス」をキーワードに強化され、その後の人気を確立したように見える。

他方で、もともとの *Sara Crewe* は、「ミンチン学院で起きたこと」としての Sarah を描くものであり、学院にとって Sarah を迎えてから見送るまでの事件だったといえるだろう。Sarah が学院にもたらしたのは、ビクトリア朝時代のイングランドで主流だった旧来の“respectability”を、新世界的グローバリズムで転覆した衝撃だったのではないか。さらに、『少年園』に連載された若松賤子の翻訳「セイラ、クルーの話。一名ミンチン女塾の出来事」（1893～94）も、ジェンダー規範にゆさぶりをかける「反時代性」（目黒、p.105）を持つものとして評価され、規範に挑戦していることが指摘されている。二者の共振について、

若松の翻訳が原作のどの部分をどうすくい取ったかを精査することで、アメリカからイギリスを見ていたBurnett と、近代化の中のジェンダー構築を一見受容しつつ、実は少し違う身振りで読者にアプローチしていた日本の若松が同じ方向を向き得ていた可能性を考えてみたい。

参考文献：目黒強「若松賤子訳「セイラ、クルーの話。」にみるジェンダー」『国文論叢』38、2007、97-107。

zoom C 12:40-14:30

●司会：笹田裕子（清泉女子大学） 12:40-14:30

発表 9 ショーン・タンの *Tales from Outer Suburbia* と *Tales from the Inner City* における背中の表象について

梅野愛子（日本女子大学大学院博士課程1年）

本発表は、ショーン・タン（Shaun Tan 1974-）の *Tales from Outer Suburbia* (2008)及び *Tales from the Inner City* (2018)の両作品内に描かれている背中の表象を、エマニュエル・レヴィナスの「顔」概念を参考にして考察してみるものである。*Tales from the Inner City* は 2020 年のケイト・グリーナウェイ賞を受賞したことでも話題となったが、タンは *The Arrival*(2006)と国際アンデルセン賞によって唯一無二の地位を確立して以降も、作品ごとに新しい世界観をうちだしている。彼の作品は自己や他者の在り様を描いた作品が多いことから、その分析には存在論からのアプローチを探ることが不可欠だと思われる。

「顔」は、把持されることのない無限の他者の現われを示すものとしてレヴィナスが掲げた概念であり、「顔」の面前において他者への無限の責任を迫られると彼は説いている。今回の発表は、この「顔」概念を参考にして、真逆に位置する背中の表象の検証を試みる。上記2作品に描かれた背中としては、例えば、火事を見つめる犬たちの背中（*Tales from Outer Suburbia*）、床に沈み込むブタや裁判所の階段をのぼるクマの背中（*Tales from the Inner City*）などが見受けられる。この「ブタ」と「クマ」の章は、同書のなかでも特に倫理的意味の強い章である。レヴィナスは同化されない絶対的他性としての他者は、それ自体が「汝、殺すなかれ」という倫理として現前するのだと主張するが、「顔」が「殺すなかれ」と命じるとすれば当該2作品における背中の表象は何を問うものだと考えられるか、その背に受動しているものを考察してみる。

発表 10 ロアルド・ダールの家庭内における異文化交流についての考察

口田珠加（中央大学法学部 3 年）

本発表では、イギリスの小説家ロアルド・ダールの家族関係に焦点を置き、移民の子どもであり、家庭内でも異なる国の異母兄弟がいた彼の生涯が、作品にどのような影響を与えたかを考察していく。

ダールはノルウェー人の両親のもとにイギリスで生まれた。彼の第一言語は家庭内で話すノルウェー語であり、夏休みにノルウェーに行くなど親戚との交流も盛んだった。ノルウェーに誇りを持っていた彼は、多くの作中に彼のルーツであるノルウェーを色濃く反映している。

ダールの父には亡くなったフランス人の先妻がおり、彼女の残した子どもはフランスにルーツがあった。家族内でノルウェー、フランス、イギリスの文化に触れることとなった彼の生涯は、外国にルーツがありアイデンティティや人間関係に悩むことが多いサード・カルチャー・キッズ（TCK）の生き方の特徴がある。

一般的にダールの作品にはユーモアの中に風刺が効いており、その表現はしばしば批判がされてきた。彼の作品には世の中に対する不信感が根底にあり、作中では弱いものが手段を選ばず権力者や強いものを負かしている。その過激さから、出版後にダール自身が修正を加えるなどの作風は、どのように作り出されたのであろうか。本発表では、TCK の特徴を紹介しながらダールの経験した異文化をまとめ、ダールの世界観について追及していく。

発表 11 生物学から見た他者理解――「クマのプーさん」における他者との共生――

相川隆行（北陸大学）

A.A.ミルンの『クマのプーさん』では、登場するキャラクターたちがお互いをどのように理解しているかが描かれている。本発表では、そうした他者理解の姿を生物学の知見から考察する。特に、社会生物学では、動物の社会的行動や進化を基に、我々人間の社会性を考察することができる。本発表では、そうした動物の社会性と物語における他者理解を合わせて考察することで、他者理解についての新たな知見を示す。

生物学は、ダーウィン (C. Darwin) の進化論以来発展してきた。特に、我々人間は高度な社会性を持った生物として位置づけられる。そして、人間に限らず生物には社会性が見られ、それは人間の社会性と比較することで、人間の独自性や人間らしさとは何かを考察するのに役立てられる。本発表では、そうした知見を基に、物語に描かれている他者理解の姿を具体的に分析する。

物語の題材としては A.A.ミルンの『クマのプーさん』及び『プー横町にたった家』(プー・シリーズ)を考察する。作品では、特に他者に対する好奇心が強いプーを中心として、動物たちの関わりが描かれている。そして、我々が他者理解を考察する際に、物語は多くの示唆を与えてくれる。それは特に、百エーカーの森という一つの舞台における共生のあり方である。本発表が考察するのは、こうした共生のための他者理解の姿である。

大会２日目　10 月 17 日（日）

50 周年記念企画音楽会とトーク　10 月 17 日（日）10:00-12:00 @Zoom A

「児童文学を聴く～子ども部屋の音楽からファンタジーの世界まで」

導入と解説：井上　征剛（山梨英和大学）

大沼　郁子（東海大学・非常勤）

英国では 19 世紀後半以降、すぐれた作曲家が次々と登場しているが、その際には、この国の大きな財産である児童文学が、一定の役割を果たしている。児童文学とつながりのある英国の作曲家はベンジャミン・ブリテン（1913-76）をはじめ多数挙げられるが、今回はその中から、主にピアノ曲と歌曲で知られるジョン・アイアランド（1879-1962）の、ロセッティの詩による作品と、20 世紀英国の顔ともいえる作曲家ラルフ・ヴォーン＝ウィリアムズ（1872-1958）の、スティーブンソンの詩による作品を紹介する。

音楽から児童文学への影響という観点からは、ファンタジー文学と音楽のつながりが注目される。C・S・ルイスはリヒャルト・ヴァーグナー（1813-83）の影響を色濃く受けていた。また、J・R・R・トールキンが強い関心を寄せたフィンランドの伝承文学『カレヴァラ』に関連して、トールキンに先行して『カレヴァラ』の伝説と幻想の世界を描いた、ジャン・シベリウス（1865-1957）の音楽にも耳を傾けてみたい。

「子ども部屋の風景」や童謡は、英語圏以外でも、数多くの作曲家を刺激したモチーフだった。クロード・ドビュッシー（1862-1918）のピアノ曲は、19 世紀末～20 世紀はじめにおける「前衛」の響きの中に童謡の要素をはめこんだ点で興味をひく。日本でも、『赤い鳥』でロセッティの詩による『風』（草川信（1893-1948）作曲）が紹介されて以来、少なからぬ作曲家たちが、英語圏の児童文学作品から強い刺激を受けて作品を書き続けている。

この音楽会の第一の目的は、児童文学と音楽というふたつのジャンルが刺激を与え合ってきた様相に触れることである。児童文学と音楽というふたつのジャンルがそれぞれに、他のジャンルと刺激を与え合って新しい世界を切り開いていくさまを目の当たりにすることで、児童文学研究の今後の可能性のひとつが、見えてくるのではないか。

音楽会：ロセッティ、スティーヴンソン、C.S.ルイス、 J.R.R.トールキン、ナーサリー・ライム、「赤い鳥」などにちなんだ曲の演奏　＜スタジオで特別に収録したものを zoom で配信＞

ピアノソロ：向井田真備

歌：薗田真木子（ソプラノ）

中川郁太郎（バリトン）

イングリッシュホルン：森明子

ピアノ伴奏：中田良

シンポジウム 10 月 17 日（日） 13:00-17:00 @Zoom A

1．研究の未来へ向けて：歴代会長リレートーク 13:00-14:30

司会: 川端有子

提題者：三宅興子、藤野紀男、白井澄子、横川寿美子、川端有子

英語圏児童文学会（旧・日本イギリス児童文学会）の会長経験者 5 人が会の歴史と、今後の課題・展望について語ります。問題意識を共有し、広くフロアの会員の皆さんと意見交換したいと思っています。ぜひ対話にご参加ください。

シンポジストは就任順に、任期中の大きな出来事と、課題だと思っていることをお話します（司会の川端は 2 度会長を務めており、現在も進行中なので最後に）。そのあと、マイクをフロアに回し、皆さんのほうから自由にご発言いただきたいと思います。よろしくお願いいたします。ここに、歴代会長からの要旨を付しておきます。

① 三宅興子 「未來・翻訳の問題・通史の必要性」（仮）

② 藤野紀男

1. 会長在任中の出来事

イギリス児童文学会の歴史における転換期

1）学会が発展充実してきた

2）一方、出版界の事情は厳しくなってきていた

3）会長の選挙による選出

そんななかで、国際児童文学会の国際大会が京都で開催された。

2. 若い方々へ

1）一つのことに精一杯取り組んでほしい。しかし、どうしても引かれることにであったら、思い切ってそれを取り上げることも辞さないで欲しい。

2）長く続けられる趣味を持って欲しい。

趣味をもつことは時間の無駄ではありません。それでひと時を心楽しく過ごせます。自然に気分転換にもなります。勉強だけでなく、他のことにおいても苦しい時は必ずあるのですが、そんな時にも心の支えになりますから。趣味の一つもない生き方は勉強に専心しているようでいて、心に全く余裕のない生き方になりがちです。

③ 白井澄子

2014 年度～16 年度にかけて会長をつとめた。川端前会長が退任されるため、後任の打診を受け、悩んだ末にお引き受けした。事務局長は笹田弘子さん。2014 年度から会長の任期は 2 年から 3

年へ延長され、また理事会も体制が刷新された。理事は全員が何らかの役割を果たすこととなり、名目だけの理事はいなくなった。
この間に研究大会に合わせて、国際グリム賞受賞者のキンバリー・レイノルズ氏の講演や同賞受賞者のペリー・ノーデルマン氏を迎えての講演を行い、華やかな活動がある一方で、学会活動低迷化の問題もあり、日本児童文学学会、絵本学会、本学会の 3 学会連携の試みも行われた。
学会の名称を「英語圏児童文学会」に変更したので、これを機にPRにも力を入れ、会員を増やす（減らさない）工夫ができると良いと思う。

④ 横川寿美子

会長在任中の大きな出来事としては、日本イギリス児童文学会から英語圏児童文学会への名称変更、および、中部支部の解散が決定されたことがあげられる。前者には＜拡大＞の、後者には＜縮小＞のイメージが伴うが、いずれにせよ今後はこの新しい形の下に、積極的に、会の魅力を開発、発信して行くことが望まれる。本会の長年の課題である会員数の伸び悩みを解消するためにも、早急な取り組みが必要である。
またその際には、研究領域の地理的な＜拡大＞だけでなく、歴史学、教育学、社会学を始めとする学際的な広がりも視野に入れると共に、本会のジェンダーバランスについても検討し、その是正に向けて知恵を出し合って行ければと思う。

⑤ 川端有子

2012 年 13 年の 2 年間、会長を務めた。前会長高田先生からの引継ぎができないままあたふたと滑り出したスタートだったが、その間会費値上げという英断？を行い、理事会を年に 2 回行うことにした。また、会としてミネルヴァ書房から出版した本に誤りが見つかり、改訂版を制作するのにほぼ 2 年間を費やした。ここで出版社との縁が切れてしまい、その後会としての出版物の目途がたたないままであることは一つの課題である。
現在英語圏児童文学会という名称に変わったものの依然として英米の児童文学研究がほとんどで、今後範囲を広げて南半球の国々にも視野を広げていきたいし、広げていってもらいたい。
また、日本人として英語圏児童文学をどう受容してきたか（特に戦後から現在）の見直しはメディアミックスの視点からも必須であると考えられる。

2. 英語圏児童文学と研究――テクノロジー・メディア・文学――　15:00-17:00

司会:　土居安子

提題者:菱田信彦、井辻朱美、森有礼、土居安子

特別参加:Catherine Butler(英 カーディフ大)

本シンポジウムでは、物語享受のありようが変化していく中で、児童文学をいかにとらえ、いかに研究していくかについて語り合う。前半の報告の後、後半は会場との意見交換を予定している。

(以下、発言順)

①「小説ではない」ものとしての児童文学:マライア・エッジワースの小説と *The Parent's Assistant*

川村学園女子大学文学部教授　菱田 信彦

児童文学は小説のサブジャンルとして論じられることが多い。しかし小説という形式が世に現れたのは 18 世紀以降、活版印刷により書籍が一般に普及してからのことであり、「子どものための物語」の歴史はそれよりずっと古い。本報告では 18 世紀末～19 世紀初頭に活躍したアングロ・アイリッシュの女性作家マライア・エッジワースの小説を、教訓物語集 *The Parent's Assistant* と比較することにより、「小説ではない」物語を書くことにいかなる意味があったのかを探る。

②動物ファンタジーと実写映画

白百合女子大学人間総合学部児童文学科教授　井辻　朱美

二十一世紀の到来とともに、ファンタジー映画の中でも「動物」を CG 実写で表現し、新しいキャラクターとしての動物を打ち出そうという流れが大きくなり、その営みに興味をひかれています。いま私たちはアニメとは違う何を実写動物に求めているのか？　生物観と擬人化の問題についても新たなフェーズに入ってきたような気がします。『スチュアートリトル』『ジャングルブック』『パディントン』『プーと大人になった僕』……。(井辻朱美)

③デジタルゲームと/の「物語」の変遷

中京大学国際学部教授　森　有礼

所謂「テレビゲーム」が登場してから、既に四十余年になるという。デジタルゲームの発展と共に、そこに窺える「物語」も変化してきた。所与の目的に沿ってタスクをクリアし、ストーリーのエンディングを目指すという読書体験に近い「物語的枠組」は、繰り返してプレイすることで物語の世界観を補完/完成させるマルチエンディング化を経て、虚構の世界(観)そのものの構築を目指すことで、伝統的な「物語」の概念を大きく刷新してきた。本発表では、デジタルゲームというテクノロジーが「物語」にどのような変遷を齎したかについて、その「ゲーム的特徴」を確認しながら辿ってゆきたい。

④最近の英語圏の児童文学研究動向を探る

大阪国際児童文学振興財団　総括専門員　土居　安子

大阪国際児童文学振興財団は、世界ですぐれた児童文学研究者を顕彰する国際グリム賞を隔年に授賞しており、さまざまな候補者がノミネートされ、受賞者が決定する。また、大阪府立中央図書館国際児童文学館では、英語圏の児童文学研究書および研究誌を毎年購入しており、報告者は選書に携わっている。そこで、メディアの急激な変化の中での近年の児童文学研究の傾向について特徴を探る。

⑤ British Young-Adult literature – Notes from the Reviewer's Desk

Catherine Butler
Reader, School of English,
Communication and Philosophy, Cardiff University

One of the common characteristics of scholars is that we tend to specialise. For example, I specialise in children' literature, and within that in fantasy and historical literature. Specialisation is useful in building expertise, but it also limits one's horizons. How can we stay aware of what is happening beyond our small corner of the field?

I have tried to counteract this problem by reviewing. For the last 10 years I have reviewed young-adult books for Armadillo, an online UK book review magazine. I have no choice about the titles assigned to me. Some I might have read in any case, but many are outside my usual range in terms of subject matter, genre or style.

Reviewing has helped to remedy my natural tendency to read only books I think will interest me, and I've made numerous happy discoveries along the way. In this paper, I describe some of the fashions in current British YA fiction through texts I have been assigned by Armadillo, and consider the different critical perspective offered by writing as a general reviewer rather than an academic scholar.